

癒が遷延し、平成4年6月8日に当院皮膚科受診。悪性黒色腫と診断され、DAV療法を1クール施行後6月19日整形外科にて右母指切断、腋下リンパ節郭清施行。リンパ節転移は陰性であった。術後DAV療法を1クール施行し退院。平成5年7月5日貧血のため内科受診。小腸造影、CT、血管造影等により小腸腫瘍と診断され10月12日当科初診となった。

経過：11月16日手術施行。回腸に小手拳大の腫瘤を認め小腸部分切除施行。組織検査にて悪性黒色腫の転移と診断された。

3) 空腸癌を合併した Peutz-Jeghers 症候群の1例

桑原 明史・小出 則彦
林 達彦・草間 昭夫
岡村 直孝・若桑 隆二 (長岡赤十字病院)
田島 健三・和田 寛治 (外科)
広田 雅行 (同 小児外科)

Peutz-Jeghers (以下 PJ) 症候群は、口唇等の色素斑と消化管ポリポース (過誤腫) を合併する疾患群で、そのポリープの癌化例は少ないとされている。我々は小腸癌を合併した PJ 症候群の1例を経験したので報告する。41歳女性で13歳の時に腸重積で腸切除を受けて以来23年間にわたり経過観察をしている症例である。今回難治性の腸閉塞症状を呈したため精査し小腸造影で空腸癌を確認した。本症の治療の要点は腸重積、出血などの早期合併症とポリープの悪性化や癌の併存などの遅発合併症に対する的確な診断と迅速な治療及び長期のフォローアップであると考えられた。

4) 慢性特発性仮性腸閉塞症 (chronic idiopathic intestinal pseudo-obstruction syndrome <CIIPS>) に対する新しい手術的治療の試み

興梠 建郎・津野 吉裕
大橋 泰博 (水原郷病院外科)

5) 消化器外科領域における真菌性眼内炎

新國 恵也・鈴木 俊繁
青野 高志・吉川 時弘 (新潟県厚生連中央
佐々木公一 (総合病院外科))

最近、外科においても日和見感染としての真菌症が増加し問題となっていていっているが、なかでも真菌性眼内炎は重篤である。今回我々は、消化器外科領域の真菌性眼内炎の発生状況について検討した。【対象、方法】過去1年間の入院症例中、抗生剤不応熱が続いた44例に対して CAND-TEC と β -D-glucan を測定し、深在性真菌症が強く疑われた14例に眼底検査を行った。【結果】真菌性眼内炎と診断された症例は5例 (35.7%) だったが、全例自覚症状はなかった。CAND-TEC、 β -D-glucan とともに陽性の群では8例中5例 (62.5%) と高率に眼内炎の合併がみられた。真菌性眼内炎の5例中3例は、癌の再発や多臓器不全により救命できず終末期に合併したもののだが、2例は IVH カテーテル感染が原因であり、早期に抗真菌剤を投与し完治した。【結語】① 術後発熱が遷延する IVH 施行例では真菌感染を念頭におき眼底検査を含めた検索が必要である。② 真菌性眼内炎に対しては早期治療が重要である。

6) MRSA 保菌患者の周術期管理経験

大川 彰・川口 英弘 (巻町国保病院外科)

近年、高齢で種々の合併症を有する患者の増加とともに MRSA 保菌者に対する周術期管理の増加が予想される。今回われわれは、MRSA 保菌者の結腸癌手術を経験したので報告する。症例は78歳女性、発熱を主訴として入院し精査にて巨大な横行結腸癌と診断された。下痢が出現するため便・鼻腔・咽頭の細菌培養を行ったところ MRSA が検出された。隔離の上 VCM の経口投与と鼻腔・咽頭の消毒を行い、便からは早期に除菌されたが鼻腔、咽頭からの除菌は困難であった。癌腫を除去し全身状態の改善を行わない限り除菌は不可能と判断し右半結腸切除術を行った。術後は便から再び MRSA が検出されたが、VCM の経口投与にて速やかに除菌された。鼻腔・咽頭からも MRSA が検出され最後まで除菌は困難であったが MRSA 感染症を発症することなく良好な経過で退院した。